

松代町の語り

1. 雪国の語り

松代町は、名にしおう豪雪地帯である。春から夏、秋にかけては、水や風の心配もなく、きわめて穏やかで、米を中心とした農耕に最適だ。しかし稲の収穫も終わった11月の半ばあたりから降り始めた雪は、いつか根雪となり、毎年数メートルの雪があたりを埋めつくし、屋根の雪をおろさねば家がつぶれる。

雪のさかりの小正月の頃は、雪がしばしば屋根の高さを越えるので、雪はおろすのではなく掘ってまわりに積み上げる。昭和59年、60年の豪雪では、積雪量が4メートルを越えた。

この雪によって、松代町の生活は夏期（春夏秋の雪のない季節）と冬期（雪の季節）に大きく二分されているとあってよいかもしれない。

夏期の生活は、春の初めの3月下旬にまだ雪に埋もれた田畑に上を入れ、雪をとかし、ほぼ雪の消えた4月下旬に苗代をつくることに始まる。

そして田作り、畔とり、田植えと作業が進み、いくつかの祭りをはさみながらも、10月の刈り入れまで激しい労働の季節が続く。かつては、朝早くからヤマ（田畑）へ出て暗くなってから帰る両親の顔を、子どもは見ることもなく過ごしたという。

こうした夏の生活の中で昔話が語られることは、一般的にはきわめて稀れで、「夏昔は語るもんじゃねえ」とか、「雪ふらん時に昔語ると鬼にさらわれる」という禁忌すらあったほどである。

これに対して、冬囲いも済んだ11月下旬からの暮らしは、昔話にふさわしいゆっくりとしたリズムをそなえている。伝統的な出稼ぎの習慣のために、壮年の男たちは雪のない都会地のつくり酒屋や紺屋に出払ってしまうが、残された老人と女子どもたちは、囲炉裏を中心とした室内のもの静かな生活を送ることになる。

もちろんこの間も、雪おろし、道踏み、駄賃とりといった屋外の激しい労働もあるが、多くの時間が芋績みや藁仕事についやされる。子どもたちが、たっぷりと心おきなく昔話の世界にひたるのは、この季節である。

そしてこの2つの季節の折り返しをなし、おそらくは昔話の語り初めにもなったのが、12月下旬のニューブレなのではあるまいか。



ニューブレは、刈り上げた稲を積み上げてニオ（稲積み）をつくり、戸外での作業を打ち上げたその振る舞い（ニオブルマイ）である。松代町の人びとは稲刈りなどの農作業を通じて、たがいに助けあい労働を交換しあう。ことに本家のように大きな田を耕している場合には、夏の間は分家の人たちの力を惜りないとやってゆけない。これを〈タダトウド〉というが、このタダトウドの礼に、本家は一日分家の衆を集めて振る舞いをする。

こうした折に、子どもたちも皆招待されて、甘酒を飲み、とうふ汁や煮しめを腹一杯ごちそうになる。興がたかまると大人たちは、東西にわかれて綱引きをするが、子どもたちもまげずに盛大に遊びまくる。するとその歓声に耐えかねて、老人たちが、囲炉裏の端に子どもたちをあつめ、「ねらねら、昔話をひとつぶさ（一つ）語ってやるすけ、そこへねまれ（座れ）」と語り始める。

松代町松代のすぐれた語り手である万羽セイさんや柳セキさんは、こんな時の語りの温かさを今もあざやかに伝えている。大人たちの哄笑をよそに、子どもたちはふしぎな語りの世界へと打ちとけて行ったのである。

こうした冬の語りの世界は、松代からさらに一步在に入り、小貫（こつなぎ）に至ると一層はっきりとした枠組みを手に入れる。それは「遊び宿」の存在である。

現在では戸数わずかに7戸、大正年間にも20戸に満たなかった小貫でも、雪は家いえを埋めつくし、閉ざし、村をすっかり孤立させてしまう。「あすび宿」は、かつてそんな冬を過ごした子どもたちの大切な愉しみの一つだった。明治末年に生まれた石地のじいちゃん（小山直治さん）の思い出はこんな風に語られる。

「12月31日のお昼に、ここは歳とりって言ってね、お正月はじめするんです。それでそんな時、子どものお年玉くれたり、お正月のごちそう食べて歳とりをおやすんです。その晩から子どもの仲間の一番上級生の世話やきの上手な子が、去年ここまでお世話になったんだから、このうちからってのね、18軒の家で昔「オモダチ」っていう村の本家株の衆が5軒あったんです、その家だけは行かんけどもあと13軒の分家に属した家を順番にね、31日の晩はここ、お元日の日はここ、そっから2目の晩はここ、3日はここ、5日はここ七草はここっていうようにね、子どもの親方がね、お願いしてまわった。

それで、その家にはその日は一日、昔話のできるお婆ちゃんかお母さんが留守番で、あとの人は全部となりかそのとなりの家へ遊びに行って、留守にして、子どもに自由に解放すると、そういう材の掟があったんです。

そのためにもね、私どもが子どもの頃には、お正月になるといって、そうやって各家をまわって歩く「あすび宿」にね、必ず行くっていうと昔話があると。それはなぜかっていう



と、あんまり子どもが元気がよすぎて、大騒ぎになってえと、留守番してる衆が『さあさあ、ねえら（おまえたち）今度は昔語るからね、ちょっと来てあたれや』と。そして火をどんどん燃やしてね、まきを燃やして、そいであたらして、まあ子ども静かにして、『昔あったと』とこうやってまあ、婆ちゃん話して聞かせる」

これが小山さんの語る「あすび宿」である。宿は、大歳の日から3月の節句まで続く。正月のうちは一日中であつたが、通常は、夕食のあと子どもたちが集まり、語りをきき、用意された豆煎りやさつま芋、里芋などを食べ、10時頃になると提灯をつけてそれぞれの家に帰ってゆく。

村には、もちろん子どものない家もあるが、子どもたちが宿を頼みに来れば、断わる者はいなかった。またオモダチの家では、あすび宿をしないが、オモダチの子たちも子どもである以上平等に宿で語りをきき、仲間だちと愉快的な時をすごした。



そして、ことに雪の深い小正月のあすび宿は楽しかった。大人たちに手伝ってもらったりして、宿の前に鳥追いの雪あなを掘り、中にロウソクを持ち込んで、宿の用意した甘酒を飲んだり、各自持ちよった餅を食べたりする。寒いのでいろりの火をどんどんたきながら、子どもたちが交代で雪を掘りあげる。そんな折の子どもたちのどよめきと瞳の輝きが、小山さんの語りの中によみがえる。

あすび宿は、子どもたちの生活の中にかつてあつた、多くの子どもだけの組織（子ども宿）の一つである。子どもは小学校に入ると義務として宿の仲間に加わり、その一切の世話は上級生の親方がみる。親方は、子どもたちの中から人望のある者が自然に選ばれて、昨年の親方から宿のきまり等をうけ継ぎ、一冬の子どもの生活の組織する。そして冬があげ、学校を卒業すれば、間もなく一人前の若者たちの組へと去ってゆく。それ故、あすび宿は、愉しみの場であると同時に教育の場でもあつた。

あすび宿の語り手たちは、それぞれ異質の語りをもっており、子どもたちは自分の家族から聞くのとは、まったく違った話に接する機会をもつた。

「それがね、行く家によってはある時には仏教に関係したようなこともあるし、ある時には親子関係で継親に育てられて悲しい想いして育った子の話があつたり、あるいは（…）古しい狸にだまされたとか、イタチがこんなことをしたとか、あるいは狐がこういうことをしたとかいうような、その家その家に独特の話をね、していただいて、それを子どもがきいてまわってたもんです。」

子どもたちは、いろいろな家に宿をして、それぞれの家に自分の家とは違った生き方やきまりがあることを学び、いろいろな話に触れることによって空想の領域を広げ、さらには話の終りにきまってつけられた教訓によって、さまざまの語り手の価値観のありどころ

を知った。

こんな折に話されるのは、もちろん昔語りばかりではなく、旅の体験話や仏教的な因果話も多かった。子どもたちは、大人たちの体験から生れた知恵や、信仰の教えに熱心に耳をかたむけ、相槌をうっていたのである。そしておそらくは、その知恵とともに語りのリズムを身につけ、いつかは話の伝承者となっていった者も少なくなかったに違いない。

もちろん、松代町の誰もがこうした宿の経験をもったわけではない。またニューブレのざわめきを楽しみ思い出としてとどめてはいても、昔語りを記憶に残している者は少ない。しかし昔語りと言えど誰もが心に描くことができるのが孫ばさ（祖母）が芋を績む姿である。

松代町は、その信仰の中心に松芋（まつう）権現をいただくことから知られるように、古代からの芋草（麻）の産地である。周辺の集落にも芋島（うのしま）、青芋平（あおそだいら）、小松沢、小荒戸（こあらと）、大荒戸など芋にちなんだ地名が多い。明治期にはすでに芋草は土地のものよりも良質の会津芋が好まれて、人びとは、松代の秋市などで、他の冬仕度の品じなとともに買い求めたようだが、かつては近郊で芋草を栽培し、いざり機で機を織っていた。

芋績み（おうみ）も、今ではもうすっかり姿を消してしまった民俗だが、かつてはどこの家でも見られた。皮をむきアクを抜き陰干しにした芋を、口にくわえ、小指をつかって髪の毛よりも細くさき、結び合わせて芋桶の中に入れる。この仕事が昔語りに適していたのは、単調な坐り仕事であることもさることながら、芋を口にくわえるために、いつも唇が湿っていた方が、都合がよかったことにもよるらしい。

冬の間年寄り同士がお茶に呼びあう時には必ず芋桶を脇にして、世間話に花を咲かせながらも手は休めなかったという。

その唇から、子どもたちにせがまれて、やがて美しい越後縮に仕立て上げられる麻糸とともに、ゆたかな昔話が次つぎと続き出されてきたのである。

昔語り結びついた冬の仕事には、ほかにもたとえば石臼ひきがある。松代の朝食は、ほぼ一年を通して「あんぼ」と呼ばれる焼餅だが、これにはくず米やシコクビエをひいた粉を用いる。夏にももちろん粉ひきはするが、冬のうちに出来るだけ粉を用意するのが女の仕事であった。そんな時、子どもは孫ばさのまえに座らされて手伝いをする。板に穴をあけたものを石臼のひき手にさして、ばさの仕事にあわせて押したり引いたりするのである。子どもはすぐに退屈して眠くなる。するとまた眠けざましに昔話がひとつさ語られたのである。

こうして雪に閉ざされた昔話との生活は、3月下旬から4月まで続く。そして雪が消えるとすばらしい解放感とともにヤマ仕事の季節がやってくる。そして昔話はしばらくお休みということになるのだが、それでもなお人びとの生活の中に生きていた。

たとえば峠の牧田チョさんが高橋八十八さんに「天道さま金ん綱」を語りながらしたこんな証言は面白い。

「おれは濁（にごり）の下林って家で生まれたがだが、おれの孫ジサ（祖父）で佐藤栄吉って人が語ってくれたんだ。ジサは昭和7年9月24日に78歳で死んだこつお」

「そのジサは面白い（おもしろい）人で、ヤマ仕事からあがってきても、すぐに泥股引

を脱ぐことしねえで、地炉（じろ）へ、ふんま（そのまま）ねまって（あぐらかいて）、『どら一丁やるか』つおって、おらに昔、語ってくれて。ほうして夕飯を食って、それから湯へ入って寝るんだっけが。おらはみんな忘れちまって、語らんなくなっちまった。いまの話（「天道さま金ん綱」のこと）だって、もっと細かく長かったもんだでも途中なかを忘れちまって、やっとこれだけしか憶えていねえがだね」

「あちゃ、いまは孫どもに語って聞かせるなんてことがなくなったすけ、語り語りしねでいると、みんな忘れちまうんだがねえ。ごそまつんがで、申し訳ねえっけのう」

もちろんこんなに話ずきで、孫おもいの爺さはどこにでもいたわけではあるまいが、一緒に風呂に入ったり、寝かしつけてもらったりする時に、爺さや婆さから昔を語ってもらった子どもは多いはずである。

また風呂といえば、もらい風呂も大切な語りの場を提供した。今とちがって昔は風呂のない家も多く、しかも薪も水も貴重であったから、風呂をたてると近隣の人たちを招待した。これが子どもたちにとっては、楽しい社交の場で、大人たちの世間話に耳をそば立てたり、語り上手な爺さ婆さに話をせがんだりしたという。

しかしこのケースでもっともユニークなのは、千年（ちとせ）の高橋モミさんの場合だろう。モミさんは根っからの物語好きだが文字を知らない。子どもの頃にも昔話はきいたが、字が読めない。結婚して千年に入ると、隣にちょうぜん（屋号）という家があり、この爺さがよく湯を借りにきてモミさんの子どもたちに昔を語ってゆく。モミさんが一生懸命お茶出しをしていると、そこへまた隣のゲンジサ（屋号）の爺さもやって来て語り比べが始まる。モミさんは、子どもへの語りとこの二人の語り合わせにすっかり心を奪われて、畑に出ても台所に立っても、それを何度も繰り返し思い出し、しまいには完全に自分のものにしてしまった。

モミさんの語りに長編の物語的嗜好がつよく、大人の色合いが濃いのもそのためかもしれない。モミさんの持ち話に、「ゲンジサの婆さ」という艶笑譚があるが、これについても面白いエピソードがある。モミさんは、この話を長年つれ添った御主人をなくしたその夜に語っているのである。

「おれの亭主が死んだ時さ、親類のとっちゃが来てさ、詣ばちゃ、今日はめ一さめ（通夜）だが、お前ひとつ歌あ唄わっしゃれ」ってこう言わあそ。『まあそったって、なじょう、いくら何でも、爺さ年とってから死んだがだんが、おりゃあええでも、まだ子どもがあるがだ。その子どもが、せつながってる子どももあるなかに、おら歌は唄わんねすけ、ほし



や昔語ろか』そいうがで、昔を仏さまの前で語ったってだ。ほうしたらみんなが背中たたき合って笑ったことあったっけのう」

こんな背景を知って、もう一度しみじみと「ゲンジサの婆さ」を読みなおしてみると、松代の大人の語りの世界も少し見えてくる。この艶笑譚のいささか荒けずりな哄笑が、ひとつの見事な芸となって、モミさんの身を助けたのである。

かつての歌垣ほどではないにせよ、昔話は挑まれて、それに答える技比べの要素もそなえていたように思われる。ことに庚申講や念仏講のような大人の語りの場の場合にはなおさらであったのではないだろうか。そこで語られたのは世間話と嫁のざんぞ話ばかりということのみでまだ十分に聞きとりが進んでいないのが残念である。

しかしここでもう一つ、大人になる一歩手前の娘たちの語りについてなら、多少わかっていることもある。それは嫁入り前の娘たちを相手に堂の庵主さまの語った昔である。

少しまえまでの松代の娘たちは、小学校にちょっと通ってそれから子守奉公、さらに14、5歳で秩父か諏訪へ糸とりに行った後、20歳くらいで嫁にゆくのが普通だった。しかし稀にはどこへも出稼ぎに行かず村に残ることがあった。そんな時娘たちは家の手伝いをしながら、各集落に一つずつあった堂の庵主さまのところで行儀と裁縫を習うことがあった。もちろん庵主さまがいつでも昔語り上手とは限らなかったろうし、娘の方が話好きであったとは限らない。しかし千年の普門庵の庵主さまと若月キョさんの場合はかなり幸運な出会いであったように思う。

「おら子どもん時は、昔話が好きで、庵主さまがどっかへ行ってくると、『庵主さま、また昔きいて来て、語ってくんねかね』つおうと、「おう語ってくれるしゃ」なんてって、どっかで聞いて来たがんの語ってくれくれしたんだでね。ほうして、『おば（妹娘の呼称）そっけんおれの面（つら）ばっか見てんなれ』なんて言うんだっけ。あちや、おれがあんまり話を夢中になって、聞かんけんねってがで、庵主さまの顔を見てらあっけんがねえ。（・・・）庵主さまが、おれの先生みてな、親みてながろそね。」

庵主さまがその時語った話がどんな性質のものであったか、これもまだ十分にはわからない。しかし今回キョさんが語ってくれた5話のうち4話が謎とき話であり、3話が婚姻譚であることは、聞き手であったキョさん自身の好みの反映でもあろうが、仏数的な色彩をも合せて娘たちへの教訓譚としての性格を認めてもよいと思う。

キョさんの語りもまた、多分に物語的であり、いわゆる昔語りとは違った娘たちの世界を映しているようにも見える。

松代町には、このほかにも婆さや爺さに正月や田休みのようなハレの日に聞かされた話、こたつや囲炉裏端で夕食のあとに語ってもらった話、縄をないながら語った話、万羽セイさんのように家業のロウソクの芯まきをしながら聞いた話等などなつかしい語りがいくらでもある。しかしこうした伝統的な語りの場は、今はほとんど残されてはいない。

2 屋号の世界

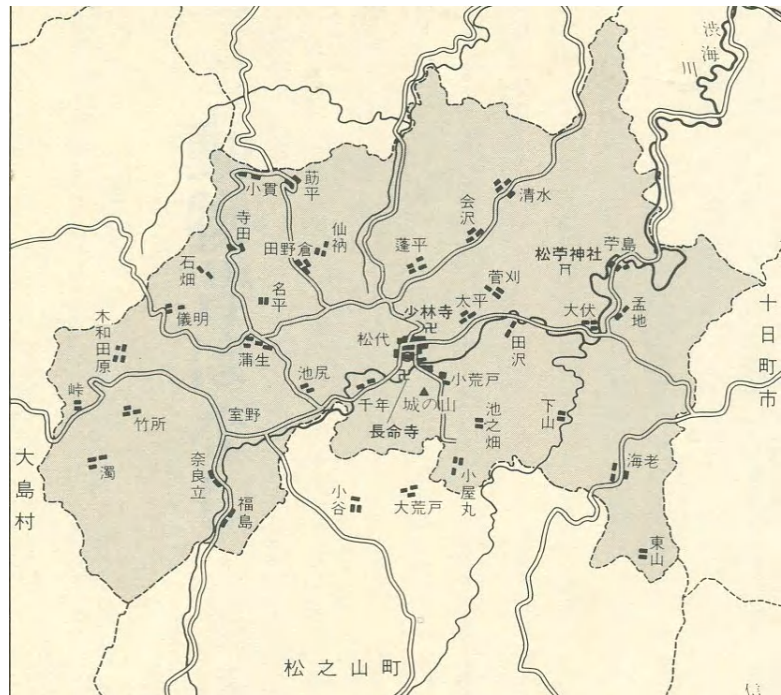
松代町の昔話のごくふつうの語り初めは「昔あったと」である。これに対して聞き手が「さすう」と答える。これはかなり厳密なきまりで、子どもたちはよく「さすう言わなきや語んね」と、爺さや婆さからこの相槌を強要された。

もちろんこの発端句には、地域や語り手によって様ざまなヴァリエーションがあって、「昔があったと」「昔があったつおー」「とんと昔があったとき」「あったとさ」「昔むかしの話そ」「昔なあ」「昔そ」などなど、いろいろである。

語り納めの結句も、「いちごさけた」が標準だが、「はあ、いちごさけた」「まず、いちごさあけた」「いちごさけもうした」という主人公の一期（運命）が栄えたという意味を推測させるものから、「えちごがさけた」「えちごさけたとう」という越後が栄えた意味、「いちごしっくり」「いっちがしっくりさけた」「いちごしっくり、ぶらーんとせ」という響きやリズムを楽しむもの、「いっちょさけた」「いっちょさけもうした」「いっちょさけぼん」という話が一つ終わったという意味の強いもの、「いきがさけた」「いきがさっきもうした」のように、話終わって疲れたというアピールの色合いの強いものなど、さまざまである。もちろんここで「いちご」の「いち」を「市」と見て「市が栄えた」とする解釈も十分可能だから、語りは実に豊かな余韻を含んでいたとすることができるだろう。

しかしこうした形式はさておいて、松代町の語りの特徴は何かと旨われたら、ぼくはためらわず「屋号の世界」の語りであると答えたい。松代町では、屋号は今日に至るまで生活の中に生きている。

ぼくたちは松代町をはじめて訪れた時、この屋号のおかげで話者さがしに大変苦労した。たとえば柳熊蔵さんという大変民俗に明るい話者がいるとわかっていても、町には柳という姓はいくらもあって柳だけではどこの柳かわからない。ところが、その熊蔵さんの「きんねん」という屋号がわかれば、「はあ、きんねんのじっちゃんかい、そりゃのう」というこ



とになってたちまち必要な情報がふるほどやってくる。

また逆に屋号だけしかわからない場合も、他所者には大変不便だ。たとえば、過去の資料集の語り手欄に「かじやしきのおじいちゃん」などと書かれているのを見ても、松代を離れてそれを見るとさっぱりイメージがわからない。しかしそれが松代町小荒戸の富沢亀次郎さんという姓名がわかると、たちまち東京からでも便りが出せるような気がして、ぐんとその存在が身近になるから不思議である。つまり屋号というのは松代という手ごろな広さの共同体に住む内側の人間と、外側の人間とを区別する実に見事な仕掛けのようである。

しかし昔話を聞くために、何度もこの町を訪れるうちに、ぼくたちにも屋号のもう少し深い意味がいくつか理解されるようになった。まずその一つは、この屋号（つまり家）とそこに住む家族の呼称の組み合わせである。

松代町では、男たちはその年齢によってジサ（当主の父）、トツツァ（当ド）、アニ（長男）、オジ（次男以下）と呼ばれる。

女はこれに対しバサ（当主の母）、力力（主婦）、アネ（長男の嫁または長女）、オバ（次女以下）と呼ばれる。

この呼称は、呼ばれる者の家の中で果たす役割や地位とはっきり結び合わされていて、たとえば地炉（囲炉裏）のまわりに座る時も横座はジサ、トツツァ、アニの席、たなもとはバサ、力力、オジ、山座敷は来客、下座敷はアネ、オバの席ときびしく決められていた。



こうした暮らしのあり様は、個々人が姓名とともに個性を保証されるはずのぼくたちの生活から比べると、随分「不自由」であるようにみえるが、必ずしもそうではない。この親族の体系は、住む者の生活にゆるぎのない確信を与える。

たとえば、屋号きんねんの長男に生まれた者は、自然にきんねんのアニからトツツァへ、トツツァからジサへと歩いてゆくのである。そしてさらにきんねんの家自体は、松代という共同体の中で、明確な位置をもち、その位置がまたきんねんのアニなりトツツァなりの性格を規定してゆくのである。そこにはもちろん「不自由」もあったが、自己の果たすべき役割、生き方についての迷いは生じにくかった。

こうした伝統的な共同体は、戦後急速に姿を変えた。ことに高度経済成長以降は町の過疎化が深化し、跡かたもないほどの打撃を受けたが、こと昔話に関する限り屋号の世界はまだ生きている。地炉が姿を消し、孫たちはみな都会地へ去ってしまっても、昔話を語る時、話者はたとえば高橋モミさんから〈ふだいぎのばちゃ〉へ、万羽セイさんから〈ぶんでんのばちゃ〉にもどって、「あちや、ほんじゃ一つ語るかのう」と目を輝かすのである。そして、そこにつむぎ出される話は、ゲンジサやチョウゼモンやコウサのジサの語ったムカシなのである。そのとき話はまぎれもなく語り手の個性、言葉、リズム、暮らしのすべて

を通して生命を受けながら、なお過去の無数の語り手たちの匿名性へと帰ってゆく。この匿名性こそ昔話の生命なのだが、それは屋号の世界と切り離すことはできない。

そしてまた、こうした昔話の個性と匿名性は、昔話の主人公にもいかされる。松代町のすぐれた語り手たちの話をひもとけばすぐに気がつくことだが、昔話の主入公たちはたいがい屋号を背負っている。

たとえば朝日屋のばちゃ（室岡ヨシさん）の語る「オササ・オマツサ」の主人公の娘は、松代の板屋の娘で浦田口の村山さんへ嫁に行く。板屋は二十三ヶ村の庄屋であり、村山もまたそれに負けぬ豪農である。ところが面白いことに、ゲンジサのバサ（関谷ワシさん）の語る「犬と猫」では、その同じ板屋が浦田口のもう一軒の豪農である田辺に宝珠を奪われて、一挙に没落する。同じようにふだいぎのばちゃの語る「てっきょう昔」に登場する知恵のあるジサにも屋号がある。同じタイプの「隠れ蓑と隠れ笠」の場合には、たけさのジサは松代の隠居（屋号）の旦那さまのところへ盗みに入るという徹底したおどけ者（トリックスター）ぶりを発揮する。



こうした例は枚挙にいとまがないが、それでは、屋号を昔話に拝借する効果は何かと問われれば、これはそれほどむずかしいことではない。一口でいえば、話を既知の世界へ引き込み、想像力に具体的な力を働かせるための仕掛けである。

たとえば「板屋」は、松代町の中心に屋敷を構えたあの現実の板屋でありながら、昔話の世界では、富や権力の象徴となる。絵本や昔話集のように、「むかしむかし、あるところに」といって話を他人行儀につき離してしまわずに、聞き手の生活世界のこととする。

板屋に比するほどの分限者には村山、田辺、赤坂。知恵者といえはてっきょう、たけさ、愚か者といえはどこそことして話に収めてしまう。しかしもちろん、昔話は伝説と違って、たとえ具体的な屋号や地名をいれても真実の話ではなく、あくまで嘘の話だから、野暮な聞き手が「そんなことは、あるものか」と怒り出したり、疑ったりすれば、「こりやウソっ話だぞい」と軽くかわす。そんな楽しい遊びも、屋号の世界にはある。しかしたといそれが嘘とはわかって、やはりいつの間にか話は伝説の風を持ち、家の栄枯盛衰、血筋の謎から、はては子どものできぬわかにかいたるまで、虚実とりまぜて説明してしまう。そんな役割もあったのではあるまいか。

もちろんこうした家と昔話との関りは、松代だけに限ったことではなく、かつては日本のあちこちに見られたことであるに違いない。そしてその結びつきは、当然話の管理・伝承の問題にまで至り、さらにハレの日の語り、ケの日の語りの区別が明らかにされることによって、語りのもつ家や共同体の「神話」的機能が明らかにされるまで進められなければならないのだろう。

しかし松代町での探訪は、残念ながらまだ（あるいはもう）そこまで至ってはいない。そこでわずかに確認できることは次の4つほどの事実である。

(1) 語りが個人を通じて伝承されてはいても、その個人は家や村といった共同体の中

にすっぽりとおさまる匿名性を有していること。

(2) 語りの個性はむしろこうした匿名性の土壌を受けてのびのびと育ってゆくのだということ。

(3) 語りの世界は、登場人物も背景となる暮らしも、家や村という共同体に具体的に結びついていること。

(4) 話はあくまでも虚構として語られながら、なおかつ家と村の現実を映し出し、性化する役割を果たしているということ。

さて、もう一度繰り返すと、こうした屋号の世界は確実に失われつつある。

伝統的なスタイルで昔話を語り継ぐための共同体はおそらく修復不可能であろう。しかしまた人がともに暮らしてゆくかぎり、話は語り継がれ、生まれ育ってゆく。とすれば松代町の場合にも、ここに収められたような伝統的な語りとそれを支える語りの場とを手がかりとして、新しい語りと共同体の論理を考える時期に、否応なく直面していると言えるだろう。

そのためにも、今後いわゆる昔話だけにとらわれず、世間噺、村噺を含めた現代の民話を掘りおこす作業がますます重要になるだろう。また伝統的な語りの喪失をいたずらに嘆くばかりではなく、学校や公民館や婦人会などを通じて新しい語りと語りの場を切り拓いてゆくことも大切である。

3 語りの数かず

『越後・松代の民話』に収められた73話の語りは、2、3の例外をのぞいて、ほとんどすべてが伝統的な昔語りである。その一つひとつには松代町の生活や語り手の個性が息づいているが、そのすべてを紹介することはできないので、20話を選んで短い解説を試みたい。

(1) うさぎとヒキゲロ

松代では蛙のことをゲエロともギャグともいう。全国的に「猿とヒキの寄合餅」として知られた話だが、松代の話は仇役が猿ではなくうさぎになっている。

話はきわめて単純で、たあいがないが、語りのリズム、ことに擬音がすばらしい。最もよく語られる話の一つである。

話に多くの地名や屋号（城の山、大新田、ぜんねんなど）が盛り込まれていることも特徴の一つで、松代町の暮らしが偲ばれる。

最後の下りで、蛙がうまそうに餅を上から食っていると、うさぎがうらやましくて「下から食え」と目をはさむのは、越後、山陰などによく知られているモチーフだが、松代では、自分の勝手だと強弁する時、「おれが何しようが、ひいきの好きやれ」という。この〈ひいき〉と〈ヒキ〉とをかけているのが万羽セイさんの語りである。



(2) カチカチ山

五大昔話の一つで、昔から絵本や教科書でもよく知られているが、ここに紹介した樋口ハツイさんの「カチカチ山」は実に無駄のない見事な語りである。ことにうさぎが杉林、竹林、かや原、たで原と上手に使いわけ、歌もいれて狸をだましているところが心にくい。

話自体はきわめて残酷な話だが、松代の語りには、前半部の婆殺しのエピソードのないものが多い。このタイプでは、うさぎが狸をやっつける理不尽さの説明がつかないから、つい話者が話の前半を忘れたのだと考えがちだが、むしろ全世界的にみると、うさぎはおどけ者（トリックスター）として、理由なく暴れまわり、残酷を地でいっていることが指摘される。だから日本の「カチカチ山」の方が、話を合理化するために前半部の婆殺しをつけ加えてしまったとする考えの方が自然である。富沢亀次郎さんの場合は、これに「うさぎの尻っぽの短いわけ」がついていて、貴重である。



(3) 猿むかし（猿婿入り）

松代では語り手なら、ほぼ誰でもこの話を知っているというほどポピュラーな話で、今回の採訪でもすぐれた語りによく出会った。しかし語られた話の数に比べてヴァリエーションが少なく、①田の水が干上がってしまう「水乞型」と②田仕事の助成を頼む「田畝い型」の二つしかない。

「猿婿」は、猿が娘を嫁にむかえる異類婚姻譚だが、他の異類婚には必ずといってよいほど動物の人間への変身があるのに、猿が一度も人間に姿を変えないという特徴がある。この場合の猿は、明らかに不思議な力をもった神的存在である。

語りはいずれも昔話に固有の三度の繰り返しを正確に守り、しかも嫁が実家に帰る〈初泊まり〉を初めとする村の民俗とともに、悲しい別れの歌をそなえた見事なものである。松代の異類婚姻譚にはこの他に「蛇婿」「田螺婿」「蛙女房」「狐女房」などがある。

(4) 小栗判官

子どものない夫婦に栗から生まれた子どもが授かるこの話は、「桃太郎」や「瓜子姫」と同じ異常誕生譚の形式をとっているが、本末は口伝による昔話ではない。絵巻物、説教節、義太夫、歌舞伎などさまざまな形で伝えられてきた宗教色の強い物語である。

松代町にはかつて、祭りのたびに芝居がかかり、祭文語り、座頭、瞽女などの芸能者が季節ごとに訪れた。中でも注目すべきなのは、替女で、高田瞽女の杉本キクエさんも一年に二度（梅雨期と秋期）に、この話の語り手である五十嵐トキさんのいる小荒戸をはじめ、松代各地を訪れている。

松代には「小栗」のほかにも「信太妻」や「安珍清姫」のような話が残されているが、これらもまたこうした芸能者を介して伝えられたものであろう。

(5) 赤坂の若旦那

「夏は風、冬は念仏屋」という謎をといて娘を探しあて、試練の末に幸せな結婚に至る。「播磨糸長」と同じ型の話だが、松茸権現の霊験譚として語られているところに特徴がある。

松茸権現は、犬伏(いぬぶせ)集落に近い山の頂にあり、松代では男の子が七歳になるとこの山に登って盛大に祝う民俗がある。

語り手である若月キヨさんは、小学校を出る年頃から4年ほど千年の堂に住む庵主さまからお針などを習い、この話をきいている。

同型の話は大平でも採録されているから、この話は松代全域で知られていた可能性が強いが、キヨさんの「雲水音」、高橋モミさんの「播磨糸長」、関谷ワシさんの「謎とき婿」など同系の話が千年に集中していることを考えると、この集落の庵主さまの語り手としての強い影響力も推測できる。



(6) あんぼむかし

「豆こぼなし」や「おむすびころりん」として全国的に親しまれたこの話には、大きくわけて地蔵さまに教えられて鬼の宝を手に入れる「地蔵浄土」と、ねずみの手助けをしたりして宝を獲得する「ねずみ浄土」の二つのタイプがある。

万羽セイさんの語る「地蔵浄土」は、爺さんと地蔵のやりとりの面白さもさることながら、随所に語られるアンボ(焼餅)の魅力に、まずひき込まれる。くず米やヒエを石臼でひいて作るアンボは、かつて松代の人たちの朝食、弁当として生活に欠くことができなかった。作り方にもいろいろ工夫があって、よい爺さん山にもってゆく菜入リアンボは大変なごちそうであった。

鈴木ハッさんと五十嵐トキさんの語りは、「ねずみ浄土」であるが、ねずみが不思議な宝を管理する話は、他にもいくつかあり、高橋モミさんの語る「ネズシの札干し」もその一つである。

(7) 鳥呑み爺さ

松代で「猿碧入り」の次によく知られた話である。爺さんが山の畑で誤って鳥を吞んでしまうと、鳥が腹の中で「アヤチョウチョウ コヤチョウチョウ ニシキサラサラ ゴヨノヨザカリ ビビラビー」と鳴く。

奇想天外な話で、典型的な隣の爺型の話として日本全国で親しまれているが、鈴木ヒサさんの語りは一味ちがう。爺さんが山へ行く途中、菜種、肥杓、肥手桶、鍬と次つぎ忘れて、やっとたどりついた山で一休みすると、美しい鳥が



やって来る。

いかにも、雪が消えて田仕事も一段落し、のんびりとした暮らしをとりもどした松代の初夏がしのばれる。

爺さのでかける観音祭りは、田植えも終わった7月のにぎやかな祭りで、市が開かれ、たくさんの見世物がかかった。松代にはこのタイプの語が多い。

『越後松代の民話』には紙数の都合で収録できなかった富沢亀次郎さんの語りは殿様のでてくる典型話だが、他にもう一つ語ってくれた話では、呑まれた鳥の尻っぼが、へそ、わきの下、頭などあちこちから飛び出して、ひっばるたびに「アヤチョウチョウ」を繰り返す果てなし話にもなっている。

(8) 清水の権兵衛むかし

松代ではかつて、雪の季節になると苧を績み、糸として、いざり機で縮みを織っていた。「清水の権兵衛むかし」は、そんな昔の生活を反映してか、爺さは十日町へ反物を売りに出かける。途中、会沢（あいさわ）で、こごえた地蔵さんにそれを巻きつけてやると、その夜さり、「清水の権兵衛（屋号）はどこだいなあ」と地蔵さんが恩返しにやってくる。

このかけ声も「提灯（屋号）の下だいなあ」という返事も、正月を迎えるにふさわしい明るいリズムをもっている。

これは松代町の北東のはずれ、清水集落の権兵衛という家の致富譚である。

これに対して西のはずれの峠には、「地蔵銀金」という活がある。こちらはあたり前の笠地蔵だが、ここでも「地蔵銀金よいとこしよ 昨日の笠のだいだいだい」というかけ声がいかに目出たい。松代にはこの他「大歳（おとし）の客」「大歳（おとし）の火」といった年迎えの致富譚が語られている。

(9) 三枚のお札

山姥に追われた小僧が、お札を投げると次つぎに山や川や火が現れて守ってくれる。これはいわゆる呪的逃走譚として世界的にも古い起源と広がりをもっているが、日本でも『古事記』のイザナギノミコトの話としてよく知られている。

松代のこの話は、主人公が長命寺の小僧で山にあけびをとりに行く。日が暮れて道に迷うと遠くに灯の明かりがチャカーンチャカーンと見えて、山姥が苧を績んでいる。なんともなつかしい語りである。囲炉裏の端でとぼしい灯りをたよりに苧を績む婆さんから、ゆったりとこの話をつむぎ出す子どもたちの恐ろしさへの期待がしのばれる。

関谷キサさんの語りでは、山姥は死んで長命寺の婆ん塚（現存）に葬られるが、塚の上は今も赤いという。いたずら者で頭のよい長命寺の小僧の話は、ほかにも関谷ハツさんの「お寺の小僧さん」という見事な語りがある。

(10) とう犬の話

千年のふだいぎのばあちゃん（高橋モミさん）のとおきのお話である。隣のチョウゼモンのジサからきいている。

「おら所へのう、毎晩まいばんお湯入り来るんだ。湯に来ているがんの、子どもが「今

夜その続き、今夜その続き」って聞くんだ。だから、なかなかちよいとなんて聞こえなかった。ほいでもおれが『今日はこういがんの語ったがだが』と思って、山へ行ってもなんでも、草とりいってても、それを考えているすけ、やっぱり覚えたんでしょね」

モミさんは文字を知らないが、物語が好きで、『金色夜叉』のような小説から「ゲンジサの婆さ」のような笑い話まで、湯もらいのお茶出ししまに小耳にはさみ、何度も繰り返して聞くうちにすっかり自分のものにしてしまったのである。こうした語りの場では、昔話にかぎらずあらゆる種類の話がたのしまれたにちがいない。

「とう犬の話」もそのせいか、普通の昔話よりもはるかに物語性が強い。松代には、この他にも「山姥の糸車」のすぐれた語りがあり（「むかしあったと」参照）、五十嵐トキさんの「三人兄弟化物退治」もその一つだが、比べてみるとモミさんの話とは、語りの雰囲気はかなり違う。

(11) せいじょ

松代には紳かくしの活かいくつかある。「せいじょ」もその一つで、普通は又兵衛の家の話として語られるので、本来はもっと短く、語りが生なましい。語る者の恐怖の体験が今も生きているかのようである。

これに対して峠の牧田ミツノさんの話は、すでに伝聞実話の域を越えて、昔語りの形式を獲得している。このことは、牧田さんの住む峠が話の中心であるせいじょの生家とされる家から距離的に十分に離れていることと無関係ではないと思う。

「せいじょ」は清十、清重など様ざまにあてられる人名だが、松代では山姥をセイジョババとも言うから、もともと鬼の名であったかもしれない。「雪の夜さりの一人呼ばりの声にゃ、出ちゃなんね」という禁忌伝承とともに囲炉裏端で語られた話であろう。

牧田さんの語りは大変見事なものだが、残念なことに私達の採訪の際には遠慮されて、一度活字になった話を読んでしまった。資料集からはずすのはあまりに心残りなのでミツノさんのお許しをいただいて掲載する。

(12) オササ・オマツサ

「手なし娘」として日本だけでなく、世界中に広い分布をもつ話だが、室岡ヨシさんのこの語りは長野の善光寺の霊験譚として語られる、よく知られた型である。

ヨシさんは明治38年1月1日生まれ、浅草に奉公に出ていたことが自慢の誠にきっぷのいい語り手である。

「牛方山姥」にしても「雷さまの昔」にしても、おそろしいほどのスピードで語られる。この「オササ・オマツサ」もかなり長い語りだが一気呵成で、相槌をうつひまもなかった。

語りに登場する松代の板屋と浦田口の村山は、この地方屈指の豪農であり、ことに「二十三ヶ村の庄屋」といわれた板屋には「てんまりぼんぼん板屋のあねさ／板屋一番だてしよでござる／五両で帯買って三両でくけた」という手毬歌が残っているほどである。地名や民俗もたつぷりと織り込まれ、かつての松代の暮らしを知る上でも大切な語りである。

(13) 法印と狐

かつて松代には「代様（たいさま）」と呼ばれる神主とは別に、「法印様」と呼ばれる修験者がおり、季節ごとに各集落をまわって家のカマドを拝んだり、病気を祈祷で治したりしていた。高橋モミさんの語りには、こうした法印様とそれを迎える人びとの暮らしが映し出されていて興味深い。

法印様が狐をおどかしたり、逆に仇討ちをされたりする背景には、かつて狐の信仰を管理した事実があるという。松代のたいさま（屋号）のばちや宮沢リャウさんの話では、先代の代様（神主）は狐憑きを下したというから、法印様もかつては狐おろしの祈祷をしたのだろう。

現在ではわずかに屋号にその名をとどめるだけで、法印様を家業としている人は松代にはいない。モミさんのこの語りも、法印さまがやめてしまうという落ちをもつのも、そのためかもしれない。

(14) 三九郎狐とおべん狐

松代には39の集落があり、今でこそアスファルトの自動車道がほとんどの集落に続いているが、かつては山の尾根と沢ぞいにさまざまの道がのびていた。その一つひとつが集落を一步でると狐の名所であり、名物狐の縄張りであった。大谷地の三九郎、滝の脇のおべん、塚のもとの女郎姫などは、その代表格であった。中でも大谷地の三九郎は、大変ないたずら者で、実に多くの笑い話が残されている。

こうした狐話の一つひとつは、全国いたるところに分布したありきたりの話だが、背後に松代の人びとの暮らしが生きている。たとえば小山直治さんの語りは、「大谷地の三九郎狐（片目ちがい）」の丁寧な語りだが、冬を迎える小貫あたりの生活が手にとるように見えてくる。本柳常三郎さんの「狐と博労」に登場する蒲生（がもう）の歳（さい）の上（屋号）の爺さや、鈴木ハツさんの「化けくらべ」の田野倉の爺さなどは、狐をはるかに上まわる知恵者である。人びとはこんな人たちの軽い冗談を楽しみに日を暮らしていたのかもかもしれない。

(15) あつき峠のシロ

この話は、シロという不思議なムジナが娘たちの所へ通ってくる異類による妻覓譚（つままぎたん）である。小出直治さんの語りには、ひと昔前の小貫の生活、ことに若者たちの暮らしが、実にあざやかに織り込まれている。

かつて日本各地の村むらには、若者組、若衆組といった自立した青年の組織があった。

若者たちは、大体15歳前後の一定の年齢に達すると若衆組に加入し、一人前の男として村の様ざまの行事に参加する。

若者たちの若衆組に対応する娘たちの組織が娘組である。娘組の組織は、若衆組に比較すると例が少ないが、小貫の場合のように季節労働を通じて娘たちが宿を組織すること



はよくある。娘たちもまた、13歳ほどになると一人前として、ヨウミ（夜績み）などに出て仕事をおぼえながら、語らいを楽しむのである。

田植えを終わった六月の末頃から、八月のお盆前まで、それぞれの家に集まってにぎやかに芋を績むのであり、若者たちはそこへ自由に出入りできたから、それはかつての数少ない男女の出会いの場であった。同じ村に住みながら、普段は立ち話ひとつできない若者にとって、仕事宿の果たした役割は、今日のぼくたちの想像をこえる。

(16) 隠れ蓑と隠れ笠

彦一話などでよく知られた誇張譚の一つ。万羽セイさんの語りは松代のタケサ（屋号）のおやじ、高橋モミさんの「てつきょう昔」は千年のテッキョウ（屋号）の爺さというそれぞれ実在の知恵者の話となっているところが面白い。

ことに松代のタケサのおやじは相当のいたずら者で、天狗さまを騙すだけではなく、小荒戸の旦那様や松代の隠居（屋号）へ盗みに入る。トリックスターとしても一流である。

モミさんの語るテッキョウの爺さは、天狗のうちわを手に入れてもそれを具体的に使用しない。むしろ「何が一番怖い」「田野久」と同じく、天狗から上手に一番欲しいものを手に入れる二次的な手段としている。しかし、いずれにせよ、二人が天狗から手に入れるうちわ、笠、蓑は、本来、神のシルシとして、不思議な力を有していたものと思われる。

(17) 屁っこき姉さ

これも全国的に分布する誇張譚だが、松代でも多く語られ、すぐれた語が多い。

屁の力で婆さを天井に吹き上げて離縁されたあねさが、とぼとぼ歩いてゆくと梨の木の下に人がいる。あねさはその人たちと賭をして、屁で梨を吹き落とし、すばらしい品を手に入れて婚家にもどる。関谷キサさんの語りでは、あねさと賭けをするのは「カナ買い」である。松代の女たちが冬中かかって芋を積み、ツムで撚りをかけ、梶（かせ）取りしたものの（カナ）を買い集めてゆくのがカナ買いの商人である。

カナは蚕とともに現金収入の少ない農家の貴重な財源であったから、あねさは屁の力で女の働きの成果を一挙に手に入れたとも言えるだろう。

万羽セイさんの語る「屁っこき嫁」は屁の力で鶴の卵を吹き落とす。話によっては、おかげで、あねさは気楽に屁をする一室を作ってもらい、それが屁屋（部屋）と呼ばれるようになったと語るものもある。

(18) 秋山のあんさ

松代には、秋山のあんさという一連の愚人譚がある。いずれも松代、十日町などから嫁をもらった秋山のあんさが繰り返す奇想天外な失敗の話だが、話型としては「旅学問」「そば知らず」「イチョウ見舞」など全国的に分布したものばかりである。

秋山は言うまでもなく信越国境地帯の古い民俗を残す山村であるが、こうした僻遠の山村を「愚か村」として笑う話群（おろか村ばなし）は、日本ばかりでなく世界各地にある。

秋山話は、現在の松代ではあまり語られなくなったが、それでも「秋山のあんさ」といえば、まず年寄りならば誰でも一つ二つは知っているはずである。なかでも室岡ヨシさん

の「やかんきんたま」は秀逸である。

ここではあんさがコンニャクを知らないことになっているが、ほかに蚊帳、餅など物や習慣を知らないことが多い。自分たちの村と山村との暮らしの違いを誇張し、山村を一段低くみて笑いのめすところに笑いの眼目があるように思われる。

(19) ゲンジサの婆さ

いわゆる座頭話のひとつとして、目の不自由な按摩をからかう話。高橋モミさんの「ゲンジサの婆さ」は、今回の採訪でたった一話きいた艶笑譚でもある。

かつて松代には、「ご坊さ」と呼ばれる盲目の旅芸人が訪れて門付けをして歩くことがあったという。彼らは集落ごとに常宿があり、主として軍談物を語ったのだが、そのあとさきに盲人を主人公としたきわどい笑い話を語ることも少なくなかったにちがいない。小堺マサさんの「ごぼさ」にも、盲人に対する自虐的ともみえる意地の悪い笑いがひそんでいる。

(20) 長い名前の子

落語の「じゅげむ」でよく知られた形式譚。子どものない夫婦が、やっとなつて授かった子どもに長生きするように長い名前をつけるが、そのあまりの長さに川に落ちた子が流れてしまう。苧島の柳クニさんの語りでは、子どもの名前は、「いっちょうぎり、にちょうぎり、ちょうぎりちょうのちょうぎぶろう あいかわしらかわ たっきのまっきのこんこんじ たかだけんしょうじ さんもんろ みずいりだ りんちりんちりちりりん よいとこす っとこ、ほいごの神 あちらの山からこちらの山まで とつつあかな一かのきょうのいとづる ぐるぐるへーじのやへーじ」という怖ろしい長さである。

これに対して関谷溥さんの語りは、名前の長さはさほどでもないが、渋海川（しづみがわ）からイクノスケ（屋号）まで至る家で、軒並み呼びとめられて子どもの名前をくり返す、果てなし話になっているところが面白い。

松代町の果てなし話には、このほか「蛇と蛙」「蜂の嫁入り」などがあり、長い話には「長いフンドシ」がある。

いずれも語り納めの合図であることが多い。

4 松代町の昔話集と採訪

松代町の昔話を考える上で、これまでに大切な仕事が4つある。一つは県立松代高等学校が三度にわたって編纂した『くびきの民話』であり、いずれも文芸部・童話クラブといった高校生が中心になって作りあげた記録であるが、きわめて質の高い仕事である。

ことに昭和53年に顧問の渡辺弘美先生を中心に編まれた一編は、松代周辺30集落を対象とし、54名の語り手から一話ずつ（計54話）を収録した見事なものである。話ごとに話者名、年齢、集落名が記され、話名も柳田國男の仕事念頭におきながら、語り手のつけた題名を一義とし、周到である。

次に松代町連合婦人会のまとめた『むかし、あったと』も忘れることができない。『くびきの民話（第三集）』よりも、さらに3年の後の昭和56年の発行だが、各集落の婦人会（3

0地区)の協力で、昔話、伝説、ことわざ、歌など105(うち昔話、伝説84話)を採録している。『くびきの民話』とまったく重複する活もいくつかあるが、貴重な記録である。

三つ目の大切な仕事は、まだ出版され公表されていないが、松代町福島の高橋八十八さんのものである。高橋さんは千年の生れで幼い頃から母の関谷ワシさんから沢山のむかしを聞き育ったこともあって、すでに昭和三十年代初めからワシさんや高橋モミさんの語りを中心に話を集めて、ノート五冊にまとめている。今回もそのうち二話(「謎とき智」「犬と描」)をいただいたが、長い年月にわたる記録であるために、記録方法がまちまちで、当面一冊にはまとめるにいが、いつか全容が明らかにされることが望まれる。

四つ目の仕事は、昭和三十二年に未来社から刊行された水沢謙一さんの『越後の民話』である。この本には、上越の話として松之山の柳長松さんの語り十九話に加えて、千年の柳藤四郎さんと高橋八十八さんの話が4話収められている。水沢さんも指摘する通り柳さんはすぐれた語り手で、松代町の語りそのものに、大きな影響を与えたことが、たとえば鈴木ハツさんの証言によっても確認できる。

私たちの記録は、以上の4つの仕事の成果を踏まえた上でなされたものである。当時専修大学の学生であった柳均君とその御家族の紹介によって専修大学樋口研究室の学生たちが、昭和57年夏から60年秋まで8次にわたって松代を訪れた。初めて語りを聞く者も多くそれぞれ学ぶことも多かったと思う。

話の記録は高橋八十八さんと樋口淳の共同作業で行われた。しかしもっと正確に言えば、貴重な時間をさいて話を語って下さった語り手の皆さんと話をききとりテープをおこした学生諸君との完全な協同作業である。

採訪にあたっては、合宿にころよく宿舎を提供して下さった松代町教育委員会、松代中学校、松代町公民館長高橋秀雄氏、松代町連合婦人会の関谷静江さん、合宿のお世話を下さった鈴木シゲノさん、御案内くださった宮沢正翁先生そしてぼくたちの採訪を最初から最後まで支え続けて下さった柳熊蔵、セキ、為治、ユキエというきんねんの皆さんにお礼を申し上げたい。

これは、民話集『越後松代の民話』(1987年・国土社)の「解説」に加筆したものです。